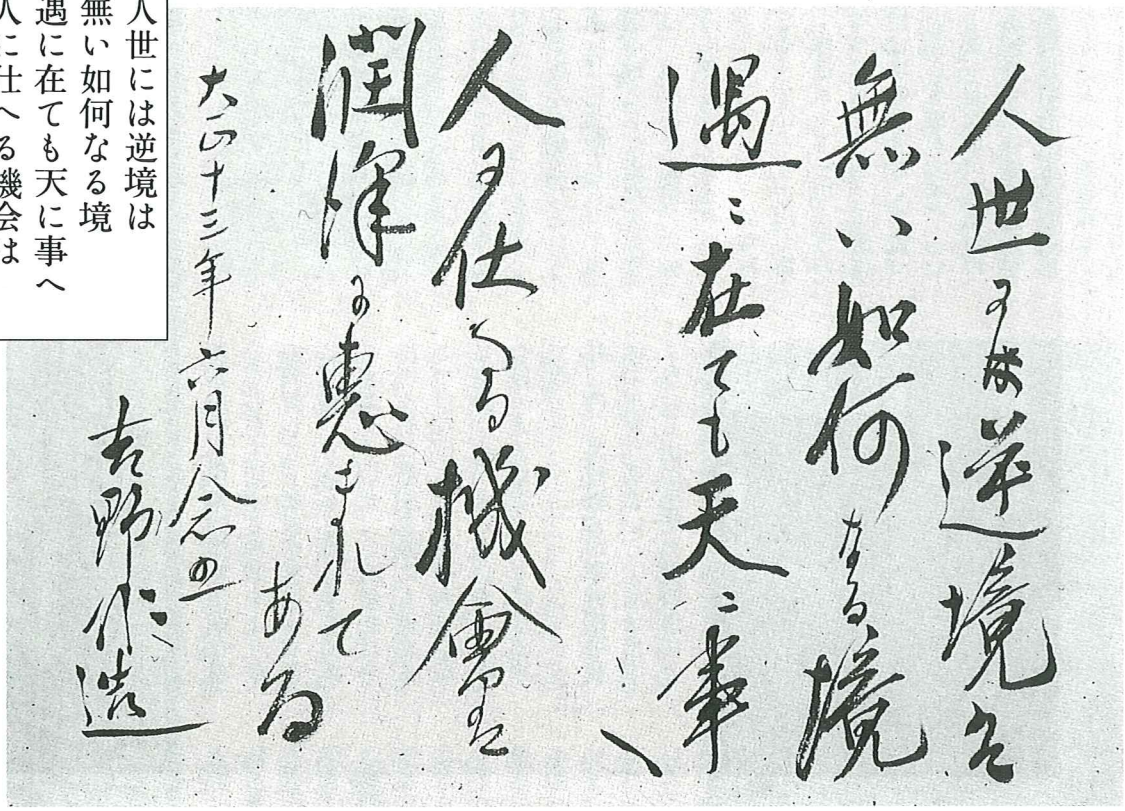
2001. 3. 31　第6号

吉野作造記念館だより

〈編集・発行〉吉野作造記念館（古川市福沼一丁目2番3号　TEL23-7100）

人世には逆境は
無い如何なる境
遇に在ても天に事へ
人に仕へる機会は
潤沢に恵まれてある
大正十三年六月念五
吉野作造



（佐佐木忠慧氏寄贈）

「人世に逆境は無い　如何なる境
遇に在ても天に事へ人に任へる機
会は潤沢に恵まれてある
大正十三年六月念五
吉野作造」

吉野が書いたこの言葉の意味を知るには、書かれた日付が重要な意味を持っています。これに先立つ一九二四年（大正十三）年二月、吉野は東京帝国大学教授という地位を捨て、朝日新聞社に編集顧問兼論説委員として入社します。吉野を迎えた朝日は、入社披露の意味をこめて朝日新聞社時局問題講演会を関西・関東・東北地方で開催します。しかし、神戸での吉野の講演内容のうち、五箇条の御誓文について語った内容が問題視されます。吉野は明治政府成立の背景を説明しながら、この御誓文が明治政府の「悲鳴」であったと論じました。この「悲鳴」発言が国家主義団体に問題視され、吉野は六月二十六日朝日を退社します。この文は退社の前日六月二十五日に書かれており、吉野の当時の心境と考えられます。朝日退社という逆境にあってもなお社会に尽くす道を模索しようとする吉野の切実な思い、その根底にあるキリスト教への信仰が吐露された貴重な一文といえます。

なお、同じ内容の一文が、二十六年に刊行した『現代政治講話』の扉にペンで書いたもので当館に所蔵されています。この文は吉野生家跡地に九十八年、古川ロータリークラブが建てた記念碑に吉野の言葉として刻まれています。

パネルディスカッション
―郷土の偉人吉野作造を伝える―
要旨紹介

第四回吉野作造講座「パネルディスカッション郷土の偉人吉野作造を伝える」が一月二十八日に開催されました。市民の立場からみた記念館や吉野作造像について討論した要旨を紹介します。

佐佐木　吉野作造は市民一般からどのように受け止められているのか、どのような形で市民文化に溶け込んでいくのか。

佐　藤　郷土が生んだ大変立派な先生だが、具体的な業績や思想については、難しくてなじめない。もっと違った感覚で捉らえられるような状況が欲しい。まもなく開館七年目を迎えるが、建設の目的や理念を、見つめなおし、総括する時期ではないか。一つは伝え手としてわかりやすく親しみやすく、市民に対してもっと開かれた記念館であって欲しい、多面的な機能を発揮できないか。

進　藤　吉野作造についていろいろ調べる中で、日本を変えた明治以降の偉人の中に吉野作造が含まれているということを知った。郷土が生んだ偉人だという誇りのもと。記念館があって当然、生誕の地として資料を保管するのは、古川市の義務。大分県の中津市ではインターネット「諭吉ネット」で、大々的な町おこしをやっている。古川も負けずに「作造ネット」のようなものを作ったらどうか。吉野作造記念館は身近じゃなくて近づきがたいというのが実感。一つはリピーターがない。2番目に個人記念館ゆえに守備範囲が狭い。3番目は明治大正の頃の日本と現在では人々の価値観も、時代背景も異なって、吉野作造の時代と共有できるものがない。神奈川県平塚博物館を市民は自分たちが生活する地域をより深く理解して、愛着を養い、本来に関わっていくための中心にあると考えていた。この思想は今後の吉野作造記念館にも使えるのではないか。市民の力をいかに施設に生かすかということが今後の大きなポイントになるのでは。

杉　内　高校教育の学習指導要領に吉野作造という名前は出てこない。山川出版の教科書には吉野作造と民本主義に関する資料が載っている。政治経済でも吉野作造、大正デモクラシー、民本主義という言葉が載っている教科書もある。日本の民主政治を紹介するときに、身近な存在から話せば、少しは興味を持ってくれるので、三人の人物、千葉卓三郎、吉野作造、鈴木文治を取り上げている。吉野に関しては、言葉は「民本」だが、彼の言ってたことは民主主義だということを、その時代背景を話しながら、時代の中で自分の信念に基づいて、世界的な視野でもってそういう判断をしていた人物がいたということを訴えかけ、吉野なり、民主主義というものの理解に結びついていけばいい。吉野について、多数の生徒が名前を知っているが、内容についてはあまり知らない。日本史の授業で、吉野作造、民本主義、大正デモクラシーを取り上げるのは、十五分ぐらいが現状。

早　坂　古川第二小学校の六年生を担任したとき、教科書に吉野作造という人物の写真と文と中身が載っており、「これは何とか使えないかな」と思い、古川の誇れる人物として六年生の社会科の中で取り入れた。理由は、日本を代表する政治学者で、普通選挙とか戦後の民主主義につながること、本校で使ってる教科書にも載っていること、古川の出身のため。最初に六年生の子供たちからアンケートを取

り、あまり知られていないので授業を組んだ。政治学者なので足跡が子供たちの見えるところにない、ふるさとの人だからといって子供たちが好きになるわけでなく、取り扱える時間が、少なかったという問題があったが記念館の学芸員に作造のエピソードなど話してもらい、作造について調べてみたいことを提示して、一人ひとりがその問題を解決するための時間を作った。結局はほとんどがこの記念館を使って解決した。これらの学習を通じて子供たちからいろいろ出された。子供たちのほうから「民本主義」を大事だといい始め、最後にアンケートした。結果として、高い成果を上げた。最後に作造への手紙を書かせた。その中で出てくる言葉に「誇りに思う人」とか「自慢できる人」「素晴らしい人」とかという言葉がいっぱい出てきた。子供たちの中にも少し意識の変化が出てきたのかなと感じた。

佐々木　要約すると、事業運営を総括する必要がある、もっと多面性を持たせる、もっと親しみやすく、あるいはもっと郷土の偉人、誇りとして捉える必要があること。小学生を対象にして、もっと学ぶ楽しさ、誇りに思う人、そういう観点からこの記念館をもっと活用できないか、とまとめられる。事業運営の総括についてはどうか。

佐　藤　まちづくりの中で吉野作造記念館の位置付けが、中途半端に思える。古川市のまちづくりの中に位置付けて、市民の意識の中に浸透させていくような強い姿勢が必要。

進　藤　このままではリピーターを期待することはできない。市民の人たちと一緒に盛り立てるためにはどうしたらいいかと考える時期に来ている。

佐　藤　市民文化に吉野をもっと根付かせていくこと、記念館の可能性を高めていくという観点から、ここを拠点にして、まちの将来のことを議論していく、人々の幸せを願って本気になって活動していくような方々の拠点的な機能を持てないか。図書館を併設すれば市民が学習する環境という点で一番いい。またわかりやすい表現方法と入りやすい雰囲気が欲しい。

進　藤　市民の足を遠ざける原因の一つに、入館料がある。「友の会」制度を作って、年会費を払えば何度でも入館できるシステムが必要。記念館の持つ専門的知識を市民にわかり易く伝える。例えば解読講座、裏打ち講座、文庫本をハードカバーに製本する講座など。記念館のまわりの全施設を活かしたリレー講座などを開催したらどうか。時代の動向を的確に捉え、進むべき方向を指し示すことができた吉野にちなみディベート大会はどうか。生きがいづくりや、居場所づくりということもこれからの行政の仕事ではないか。みんなが楽しむためにはどうしたらいいのかというところのコントロール役が行政に任されるのではないか。

佐佐木　行政だけに任せるのは難しいので、ボランティアの支援を頂くことも必要。

杉　内　学校教育を一つの橋渡しにしながら、生涯教育にわたって吉野作造を自分の中で考えていけるような環境をつくっていくことが古川市や古川市民に課せられている。もっと市がピーアールすべき。今度総合的学習の時間が設けられ、キーワードの中に「郷土」「地域」を念頭に置くことになった。今後、吉野作造を取り上げる機会、要素はある。

早　坂　吉野作造という人物を知らないで育つ子供たちと、そうでない子供たちでは差が大きい。古川の子供たちに、吉野作造という人物はこういう人だということを皆に知ってもらいたい。記念館をいつでも利用できる環境があれば。

佐佐木　「民本主義」という政治的な方法論を吉野は理論化したが、社会の中では生きてるが名前は忘れられるのが学者の宿命。古川の生んだ吉野作造の社会的な価値ということになれば、近代日本を作った人物。伝統というものは必ずよみがえる。そのためには絶えず発信しなければならない。次の世代ではもっともっと輝くのでは。そのためには古川の生んだ吉野作造先生を改めて伝えていく必要がある。

コーディネーター紹介

佐佐木忠慧（ささきたださと）
一九三一年古川市生まれ。宮城学院女子大学教授、同大学院教授を経て九十八年より名誉教授。現在市民ギャラリー緒絶の館館長、古川市文化財保護委員会委員長、古川市史編さん委員等文化行政で活躍。

パネリスト紹介

佐藤多賀典（さとうたかのり）
一九六一年古川市生まれ。「ふるかわ市民創作劇場」第二回より参加、第四回副実行委員長。

進藤　恵美（しんどうえみ）
一九五六年山形県河北町生まれ。九十三年より古川市に転入。田尻町立大貫小学校情報アドバイザー、宮城県森林インストラクタ。

杉内　弘行（すぎうちひろゆき）
一九五五年丸森町生まれ。築館高校、名取北高校、仙台南高校を経て九十六年より宮城県古川女子高校。

早坂　雅彦（はやさかまさひこ）
一九五九年小野田町生まれ。志津川小、開北小、旭小を経て九十五年より古川第二小学校勤務。

企画展紹介

柳田國男と吉野作造

―しだれ櫻をめぐって―

このたびの企画展では、日本民俗学の祖・柳田國男と、吉野作造との知られざる交遊関係を中心に、東北を旅した二人の足跡や、古川の民俗芸能や行事を紹介しています。

【期　間】
2001年3月6日(火)～5月31日(木)
【場　所】
吉野作造記念館
【入館料】
一　般 310円　高校生 210円
小・中学生 100円

① しだれ櫻をめぐる交遊

柳田は吉野より三才年長で、共に東京帝国大学法科大学政治科出身だった。間接的な交流は一九一五年ごろ（大正四）よりあった。一九二四年（大正十三年）二月、朝日新聞社に同期入社した二人は、共に関西や東北地方を講演旅行した。四月中旬には仙台、秋田、山形で共に講演旅行した。この際古川にも立ち寄り、友人内ケ崎作三郎の選挙応援演説もしている。山形市での講演の際、千歳館から見たしだれ桜の美しさをきっかけに、仙台のしだれ桜に話が及び、吉野は柳田に地元宮城県仙台のしだれ桜を贈ることになった。この桜は、エドヒガン群のシダレ型で花色はうすく一重のもので、現在も世田谷区成城の柳田邸で花を咲かせている。

二人の直接的な交遊関係はこれ以後始まる。神戸の講演を右翼団体が告訴したのをきっかけに吉野は六月二十六日退社する。吉野を助けるため柳田も東西を奔走したと伝えられている。朝日退社後も交流は続いた。吉野が同年十一月立ち上げた明治文化研究会の賛助員として柳田も名を連ねている。明治期の文献研究を始めて日の浅い吉野にとって柳田は先輩でもあった。

また、吉野は成城の柳田邸とともに、朝日新聞社の下村宏自宅の西宮市苦楽園（くらくえん）にもしだれ桜を送っている。下村草稿「大正十三年思い出草」には、吉野退社にまつわる問題がメモ風に記されている。吉野は退社後も明治の文献や古本に関し下村と交流した。なお下村と柳田は旧知の間柄だった。

柳田は、民俗の問題としてしだれ桜を取り上げている。しだれ桜の成長には何らかの人為が必要であり、桜の場所に昔の人々の意図があると考えた。旅行での観察体験などから、霊場や死者を祭る場所にしだれ桜やしだれ栗を植えた信仰風習があったと推測、昔はしだれた樹木に神霊が降りてくると考えられていた、と仮定した。

② 東北の旅・柳田と吉野

柳田は一九〇五（明治三十八）年から一九六〇年（昭和三十五）までに三〇回東北地方を訪れている。なかでも一九二〇年（大正九）朝日入社を契機に始まる旅は柳田にとって「旅の学問」を確立する重要な意味をもつ。この時の東北旅行は四十二日間に及んだ。宮城県内へは十四回、主に講演会や大学の講義で訪れている。年譜に記載されていないが、一九三〇年（昭和五）初夏には石巻を訪れ、教育勅語は郷土教育に言及がないのが不満だと述べ、憲兵が柳田宅に来たという「事件」もあった。柳田にとって旅は学問の方法である。旅行場所も名所旧跡ではなく、多様な日本の実情を見聞するために辺境の地に好んで足を向けている。そして各地で郷土や民俗に関する地域の研究者を育成しようとした。

吉野にとって旅行は講師としての講演旅行及び選挙応援演説と家族の慰安旅行がその主な内容である。訪れた場所も現在の県庁所在地中心で、都市中心の旅行である。主に政治の現状や批判など時事問題中心に講演をして人々の政治意識の啓発を行った。一九二〇年代以降の吉野の旅先での楽しみは古本市めぐりだった。家族旅行の行き先は専ら温泉で、宮城県内では白石や鳴子で日常の疲れをいやした。

③ 古川の民俗

古川の民俗として、一九七四年に古川市指定無形民俗文化財となった保柳神楽（ほやなぎかぐら）の衣装やお面、神楽をビデオで紹介。また一九八八年宮城県指定無形民俗文化財となった米倉鹿島（かしま）神社献饌（けんせん）行事の様子をビデオと写真で紹介している。

そして古川の各地に伝わる小野小町（おのの こまち）伝説を、伝説の場所を地図と写真で紹介、巫女などの女性宗教者たちがこの地で亡くなった事実が、小野小町伝説となったという柳田の説も紹介している。

柳田國男（1923年）

吉野作造（大正末期）

古川高校見学感想文

恒例になった古川高校一年生世界史授業の記念館見学が今年も十二月に行われました。その感想文のなかから三編紹介します。

吉野作造について

渡辺浩輔

私が吉野作造という名を初めて知ったのは中学校の歴史の授業であり、まさか教科書に載るほどの人が古川市の出身だとは思いもよりませんでした。

「大正デモクラシー」という一つの大きな運動の波をつくり出し、「民本主義」を主張し国民の幸福を目指したということに強い関心と尊敬の念を抱きました。それと同時に吉野作造がいかに時代の先を行った思想の持ち主で、大正当時の社会体制にも屈しない強い信念と理想があったことが私には大変に羨ましく思えました。

今まで私は、自分自身の将来について不安を感じていましたが、吉野作造のような自分というものをしっかり持って、勉強にもこれまで以上に身を引き締めて、今の段階から頑張っていけば自分の将来だって素晴らしいものになると思えるようになりました。そして、自分だけの意識に捕らわれず、周囲の意見にも耳を傾け、他の人に対して尊敬の念を持って接していきたいと思い始めました。

今日、日本は国際化という時代を迎え吉野作造のように広い視野と教養を身につけていきたいと思いました。私はこのように歴史の人物たちの業績とその当時の社会背景を学ぶことにより、人というのは、自分の世界観を広めることができ、自分だけでなく、周囲にも良い影響が広まっていくように思えました。今回の「吉野作造記念館見学」は、自分にとって非常に勉強になり改めて歴史が好きになりました。

吉野作造記念館にて

早坂恭一

以前にも一度だけ「吉野作造記念館」に行ったことがある。あの時はまだ小学生だったのでよく覚えていなかったが、中に入ると何となく記憶がよみがえった。大正・昭和という激動の時代を「民本主義」の思想で駆け抜けた吉野作造という偉大な人物を改めて知ることができたのだ。

彼が古川出身であることは既知の事実であったが、中学の時に古高の卒業生と教えられていたので、一高卒と知った時は多少驚いた。ここで改めて仙台一高という学校のすごさを感じた。東京帝国大学法科大学、当時は純粋なエリートが集結する大学で様々な人と交わり、多くのことを学び、キリスト教にも心酔した。

ところで、彼の一生のVTRか学芸員の説明を聞いて気づいたことが一つある。それは友人である。前に古高で講演なさった東大の助教授の先生は、「私の人生の岐路においては常に友人がいた。」とおっしゃっていた。これは吉野作造も同じで、鈴木文治のような友がいなければ偉大な政治思想家として、その名を歴史に刻むことは無かったであろう。やはり友人の影響は多大なものがある。僕も古高に来て八ヶ月になるが、吉野作造のように互いを磨き合い、一生付き合えるような友人をつくりたいと思った。この見学はいろいろな意味で非常に有意義なものとなった。

感想文

黒沢真

私はこの世界史の授業を通して、身近にいるたくさんの偉大な方達の一人である吉野作造博士のことをよく知ることが出来ました。日本の政治の有り方を考え、政治の中心を国民とした民本主義を主張しました。いまや日本を動かした方がこの古川にいたことは誇りに思ってもよいと思います。吉野作造博士は、中国へ渡り家庭教師をしたこともあるそうです。大人になってからほとんどこの古川に戻ることはなかったと聞いています。それ程多忙な方だったのに、心の隅にはやはり故郷への思いがあったのか、古川学人というペンネームですばらしい作品をつくり上げました。「路行かざれば到らず事為さざれば成らず」大まかな意味として、そのものが良かったか悪かったか、あるいはとんでもない事なのか、すべての事はまず初めに一歩踏み出さなければ分からない。とにかく踏み出すことが大切である。このような意味である。この言葉は、どこでもいつでも、だれにでも言えることのように思える。自分の欲求のために目標をもち、行動しそして結果が出る。この言葉にはたくさんのことが凝縮されているのだと思う。これからは、この吉野作造博士の後を追っていくようなすばらしい人材がまたこの古川から誕生してほしいと思う。そして私もまた吉野作造博士のように前向きに、そして目標を持って生きていきたいと思う。たとえ、吉野作造博士のようなエリート街道ではなくとも、自分の良い点、長所を人より延ばせるようにしたい。少しでも、少しでも自分の真念に近づけるようになったら、その時立派な大人になれると思う。

新発見資料紹介

山口仁道より吉野作造あて書簡案

「東京市本郷区駒込神明町三二七吉野作造氏郵便発　拝誦其の後は久しク御目にかかりませんでしたが、御健在の由大慶で有ます。私も六拾一才で有ますが、相変らず蒐集に努めて居ります。昨年拾月弐拾六日より表記の所への器搬送初め本年壱月拾弐日迄から単独にて陳列、拾四日より開館仕候。間口七間奥行五間半の建物ですが例帳ガラクタ物が豊富で全部陳列が出来んので遺憾です。成績がよかったら段々増築せうと思ひます。賤息は拾七才で海軍志願、東京海軍経理学校選抜生で砲術水雷校を廻はり、青嶋の役に参加、戦後暇休となり引続き横須賀海軍軍港に務部帳経理をやって居ります。うるさき都会にて静養なさるよりは温泉にでも転地なされては如何。拙宅には自然温泉の浴槽も有ますから暖かになりましたら御出での上陳列品を御覧被下たく、先ずは御挨拶まで拝復

昭和七年弐月十八日認　　山口仁道　　吉野作造様

（教育参考品陳列館と致ますたら皆が通りが悪るいから考古博物館としたがよからうとの衆議に依り、博物館とは笑止千萬）」

（読みやすいように句読点を付しました）

山口仁道（一九七二～一九四二）は吉野より六才年上の岩出山町の東陽寺住職であった。好奇心が強く几帳面で努力家という人柄で、最初は檀家のことを記すために始めたという克明な日記や書類が残されている。

吉野とは明治年間より交流があり、「自明治二六年至明治三二年」と記された「賜品簿」には吉野作造が三回訪れたことが記載されている。一九〇一年（明治三一）七月二五日には「手拭」を土産に盆の挨拶に訪れ、同年九月一日「中綿」一包みを土産に来訪、さらに翌年六月四日にも「湯巻木綿」等を持参して来訪したことが記されている。吉野は当時東京帝国大学生で、夏休みの際綿屋を営んでいた実家よりみやげ物を調達して訪れたのだろう。

書簡案からは、一九三五年（昭和七）一月に山口が鳴子町車場に開館した私立「鳴子教育参考品陳列所」の準備について、山口の息子薫の様子、そして当時身体を悪くしていた吉野に転地療養をすすめたことがわかる。まだ不明な点も多いものの、吉野と大崎地方の人との交流を示す貴重な資料である。

（山口順喜氏提供）

古川市史に吉野作造を執筆

永澤汪恭（ひろやす）さん（宮城学院社会科教諭）に聞く

古川市に生まれた私の小中学校時代、古川で吉野といえば吉野信次のことで、作造を知る人は極めて少なかったようです。私の兄（故喜一氏）も作造を知らず、一九四九年矢内原忠雄との出会いの席で、同郷の偉人を教えられました。それ以後兄は、作造の文献を熱心に集め、その顕彰運動に参加しました。

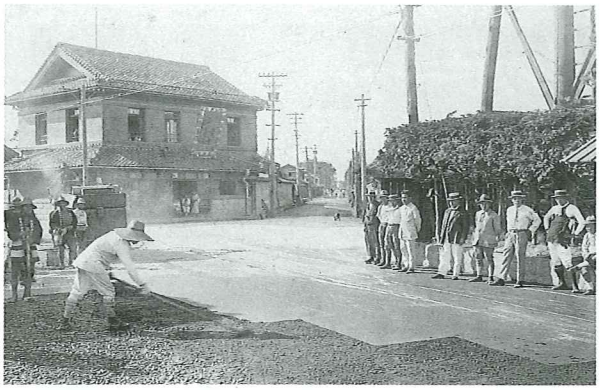
私が吉野を研究しようと思ったのは宮城学院の社会科教師になってからでした。七〇年代学内外で民主化が叫ばれるなかで民主主義の源流に関心をもち、兄の影響もあってその集めた文献のなかの『故吉野博士を語る』を読み、その人間性に惹かれ、吉野作造の人と思想を多くの人に伝えたいと思いました。また宮城県歴史教育者協議会の有志と吉野と地域のかかわりについて着目し、聞き取りを始めました。今は亡き大友為三郎、三浦茂雄、澁谷榮太郎、三春重雄、加藤栄之丞の諸氏から吉野生前当時の貴重な証言も伺いました。これらの証言内容の報告や、吉野の宮城県における足跡の調査の報告を内容とする『吉野作造通信』を八六年に創刊しました。

今では国内はもとより中国、フランス、アメリカなど海外にも読者があり、人間吉野に魅せられた人々によって発行の支援がなされ、ささやかな交流の場となっています。

『古川市史』では、吉野作造と古川市の関係を市民に知ってもらいたい、また記念館ができるまでの歴史は古川文化史上重要だという思いから、吉野の生涯を古川市との関係で紹介し、また戦後の吉野作造顕彰運動史を執筆しました。戦後、吉野作造の顕彰に参集した古川の人々は「平和と民主主義」を主張した吉野の影響を受けて、実践した人たちです。彼らの活動は吉野が古川に与えた影響を物語っています。

『吉野作造通信』に関心のある方は022（229）0534　永澤まで。

吉野作造関係記述は『古川市史　第五巻教育・文化』（税込3000円、三月三〇日発行）に掲載。当館でもお買い求めいただけます。

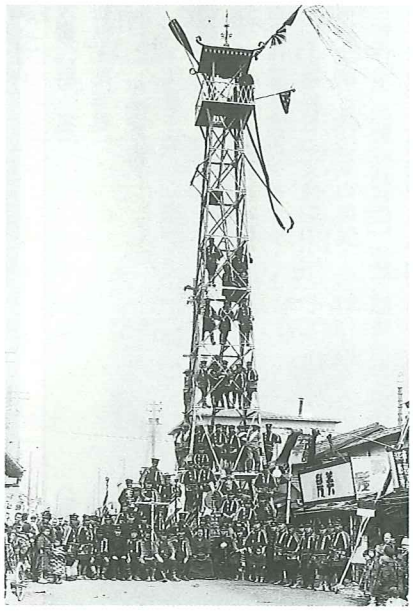


発見 古川の昔の写真たち

吉野作造記念館では、
吉野作造関連資料の収集として、近代の古川関係の写真資料も収集しています。
今年度は佐々木謙次氏より40点にのぼる貴重な写真を提供して頂きました。これらのうち1985年から一年間、仙北新聞で紹介された写真があります。そのなかから、5点をご紹介します。

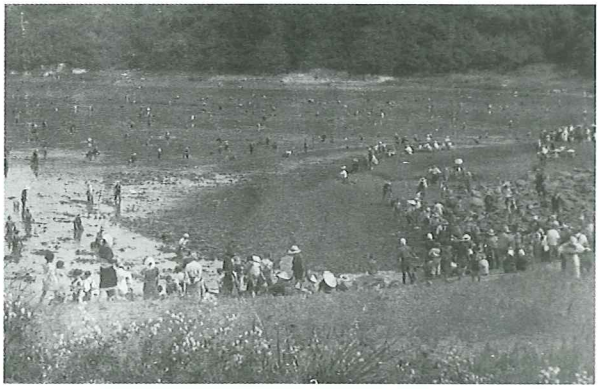
① 昭和初期のアスファルト舗装工事

古川で最初に舗装道路が出現したのは1924年（大正13）で、川端から七日町に通じる星屋横丁が第１号といわれている。写真は佐々木稜治町長時代に米城本店前の千手寺入口交差点付近で行われたアスファルト舗装工事。作業を見学している人たちの中央が佐々木町長。当時はすべて人力に頼ったため経費も日数もかなりかかったという。



② 昭和初期、桜丁火の見やぐらでの消防出初式

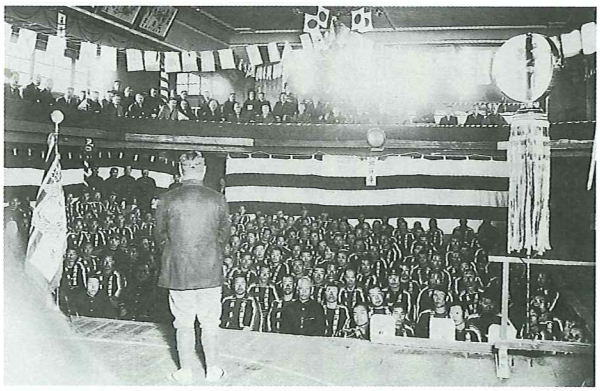
古川消防組は明治時代、稲葉と大柿の火消し組により発足した。大正にはいってから装備も整い、組員は150人に増員、昭和には自動車ポンプ１台を購入した。写真は佐々木町長時代のもので、中央に町長の姿が見える。



③ 1935年ごろ行われた化女沼の沼干し

古くからコメビツ沼と呼ばれていた化女沼は、沼での漁と用水源であることによって、かつて生計に重要な役割を果たしていたという。

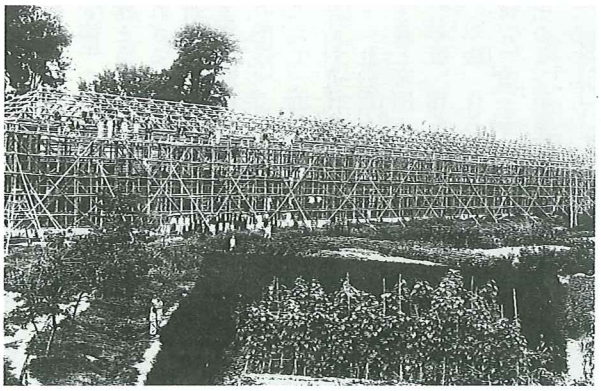
このときの沼干しでは数百人が腰まで泥になってコイやフナ、ウナギ、雷魚などを捕まえた。沼干しは数年おきに行われたが、参加者の話によれば毎回豊漁だったという。



⑤ 昭和初期、古川座での出初式

古川座は1912年に建設され、中央に廻り舞台、花道にはせり出しがあり、当時としてはめずらしい洋風建物だった。出初式は旧暦の正月明けに行われたため、吹雪などの悪天候で室内で開催されることがたびたびあった。

写真では、１階席に組員、２階席に来賓が座り、式に臨んだ様子がわかる。



④ 古川尋常高等小学校の南校舎上棟式（1930年８月）

古川小学校（現在の古川第一小学校）は1873年開校した。写真は1930年８月に上棟した南校舎で、当時の児童数は2,000人を超え、教員は47人、37学級あった。この校舎は現在も使用されている。

2000年度事業レポート

◎4月29日～6月25日
　企画展「吉野作造の写真展」
◎5月3日～5月5日
　子供映画会「ブンナよ木からおりてこい」他
◎8月20日
　第1回吉野作造講座
　　「井上ひさしの吉野作造講座④⑤」
◎8月29日～10月9日
　特別展「遅筆堂文庫展」
◎9月23日
　第2回吉野作造講座
　　「吉野作造ゆかりの場所ウォーキング」
◎11月18日
　第3回吉野作造講座「よみ語り吉野作造」
◎1月28日
　第4回吉野作造講座
　　「パネルディスカッション
　　『郷土の偉人 吉野作造を伝える』」
◎3月6日～5月31日
　企　画　展
　　「柳田國男と吉野作造－しだれ櫻をめぐって－」

二〇〇〇年 受贈資料一覧（敬称略）

〈資料名〉	〈寄贈者〉
中村秋三郎写真	太田　雅夫
『『自伝』の読み方 ―実証主義の立場から―」（抜刷）	〃
憲法政治学研	〃
憲法大学講座講演レジュメ	〃
「吉野作造と大正デモクラシー ―若き日の実像を中心として―」	〃
「司法改革と陪審制の復興―吉野作造と大正陪審法」	〃
『吉野作造「試験成功法」』読後感抜粋（礼状書簡より）	〃
『吉野作造「試験成功法」』関係記事四種	〃
『Bib―ia』第三十五号	〃
「司法改革と陪審制の復興 ―現在も生きている陪審法―」	〃
「大正陪審法制定記―政治史の視点から―」（複写）	〃
菅原伝あて孫文書簡関係資料	〃
「同志社人に知られざる多賀城の拓本とイスジョンの書」（レジュメ）	〃
佐々木平之丞あて書簡（菅原伝・宮城伊兵衛発信）その他（複写）	田中　昌亮
戸石泰一散文　四点	〃
宮城伊兵衛関係資料（複写）	〃
宮城伊兵衛写真及び宮城浩一郎氏聞き書きテープ	〃
佐々木平太郎あて清野金太郎書簡他（複写）	佐々木一郎
「吉野作造博士没後50年記念　郷土のしおり」第四集	〃
「風の生涯」第四五〇回（『日本経済新聞』抜粋）	〃
佐々木平之丞あて赤松克磨封書	〃
『歌集　川べの宿』	扇畑　利枝
『群山』	〃
『日本思想史学』第三十二号	平野　敬和
『内破する知』	万城目牧子
『宮武外骨』	〃
『沖縄　平和と自立への闘い ―写真と語録で見る大田知事の2990日』	佐々木俊彦
『国民国家の構図』	秋山　真一
『人物・資料でわかる日本の歴史　明治・大正時代』	岩崎書店編集部
「桃山学院大学教育研究所紀要」第九号	桃山学院大学教育研究所
『デモクラシー』	千葉由紀子
『自由主義者石橋湛山その思想と言論』	〃
『吉野作造と石橋湛山の略年譜（一八七八～一九三三）』	〃
「遠賀川武士器を論じて、海洋神・金属資源に及ぶ」（抜刷）	佐佐木忠慧
「みちのくの鐵文化を論じて、「たちはたまつくり」に及ぶ」（抜刷）	〃
「歌枕玉造江を論じて、小町説話に及ぶ」（抜刷）	〃
『舞草刀研究紀要』平成十二年	〃
『人物図解日本の歴史』	あかね書房
『民衆政治講座』	祇園寺則夫
『戦前の欧州』	〃
『政治学　政治史　全』	〃
『明治政史　下篇』	〃
「the座」	こまつ座
『文学館とうほく紀行』	無明舎出版
『知られざるいのちの思想家　新井奥邃を読みとく』	工藤　正三
新井奥邃関係資料二点	〃
『閑談の閑談』	宍戸　朗大
『海をこえて　近代知識人の冒険』	秀明出版会
『吉野作造対近代中国的認識与評価 …一九〇六～一九三二』	石堂　清倫
『民本主義と帝国主義』（書評）	平野　敬和
二〇〇〇年版　作ちゃんブック〈教師編〉	早坂　雅彦
二〇〇〇年版　作ちゃんブック〈児童用〉	〃
『日本研究』第二十一集（抜刷）	原　秀成
『思い出の父　栗原基』3部	栗原　健
『知ってるつもり?!　江青vs周恩来』（ビデオテープ）	ネバーランド